濱田國松の選挙地盤確立過程についての一考察

仲田　圭佑
（玉井研究会４年）

序　章
Ⅰ　大選挙区制時代
　1　第７回総選挙（明治35年）
　2　第８回選挙（明治36年）
　3　第９回総選挙（明治37年）
　4　第10回総選挙（明治41年）
　5　第11回選挙（明治45年）
　6　第12回選挙（大正４年）
　7　第13回選挙（大正６年）
　小　括
Ⅱ　小選挙区制時代
　1　第14回総選挙（大正９年）
　2　第15回選挙（大正13年）
　小　括
Ⅲ　中選挙区制時代
　1　第16回総選挙（昭和３年）
　2　第17回総選挙（昭和５年）
　3　第18回総選挙（昭和７年）
　4　第19回総選挙（昭和11年）
　5　第20回総選挙（昭和12年）
　小　括
結　語

序　章

濱田國松は、昭和12（1937）年１月、広田弘毅内閣を倒閣へと導く契機となった、いわゆる「腹切り問答」で有名である。この「腹切り問答」により日本政治史に名前を残すことになる濱田ではあるが、彼の政治家の生涯を追った研究は希薄である。

濱田は、慶應４（1868）年４月２日に現伊勢市の山間部に生まれた。生家は「山村」という姓の神主の家系だったが貧しい上に兄弟が多かったため[1)]、士族の濱田清三郎の元へ養子に出されることとなる。

三重師範学校（現：三重大学教育学部）を卒業後、現在の鳥羽市で小学校教員となった。しかし、赴任先の小学校は曲者の教員ばかりであった。そのため、郡長から「活躍を示せば昇給させる」[2)] と、取引を持ち掛けられたのである。濱田は郡長の言葉を信じ仕事に邁進したが、昇給の約束を反故にされたため、郡長を殴りつけるという暴力沙汰を起こす。懲戒解雇となる前に退職届を電報で提出し、その足で上京する。

上京後の濱田は困窮を極めた。所持金は、小学校の給与の５円のみであったため、数日は既知の家に身を寄せた[3)]。その後、日本橋堀止小学校で職を得て、教壇に立つ側ら東京法学院に通い、代言人となることを目指した。東京でも濱田の給与は５円であり、学費が１円、下宿代が食費等含めて３円50銭であった[4)]。差し引きすると50銭しか残らず、銭湯代は当時一回50銭であったため、毎日風呂に入ることさえできなかった。時には、学費を滞納したため在学証が発行されず、登校時に守衛に引き留められることもあったという。

濱田は、昼は働きに出るという多忙な中で、勉学に邁進した。郷里に残した家族から時折手紙が来たが、勉学に専念するため手紙の封を開けなかったほどである。しかし、そのような生活の中で、濱田にも同じ境遇の学友ができた。後に大逆事件で幸徳秋水らを弁護した花井卓蔵や、新潟県選出の代議士となる鳥居鍗次郎らである。彼らも昼は働きに出る側ら、代言人となることを目指して勉学に励んでいた。濱田は時に彼らと机を並べて学び、明治26（1893）年の第一回弁護士試験[5)] に合格した。試験は難関であり、濱田が合格した第一回弁護士試験の合格率は不明だが、1897年から1908年までの平均で合格率は5.2％であった[6)]。

濱田は試験に合格後、養子先の濱田家を継ぐため帰郷し、代言士事務所を開業

した。その後は、地元の紛争を調停する調査委員を務めるなど、地域に尽力していった。そして、政界進出に興味を抱き[7]、第７回総選挙（明治35年実施）に初出馬することとなる。

濱田は第７回、続く第８回（明治36年実施）、両総選挙に出馬したが落選、第９回総選挙（明治37年実施）に初当選し、以降12回連続当選を果たすことになる。院内会派は甲辰倶楽部、政交倶楽部、猶興会、又新会と所属を変え、明治43（1910）年に立憲国民党の結成に参画する。その後、衆議院副議長を経て大正11(1922) 年には犬養毅と行動を共にし、革新倶楽部を結成し、大正14（1925）年には、同倶楽部とともに立憲政友会に合流した。また、濱田は犬養の後援組織である木堂会の主要メンバーであり、犬養との関係は、五・一五事件後には木堂会の会報に追悼文を寄稿するほどであった。

濱田は「腹切り問答」により、近代日本政治を語る文脈の中で、屢々言及される政治家ではあるが、彼が政治家として活躍するために必要な総選挙で当選を勝ち取ること、そのための選挙地盤について考察した研究は、必ずしも多くはない。田中麻愛、渡辺穣[8] や、「伊勢市史」[9] などが、地元新聞『伊勢新聞』を駆使し分析しているものの、濱田の初期の選挙運動に限定されていて、初出馬した第７回から第20回総選挙までの選挙経歴を通観し、その選挙地盤の内実を解き明かした研究はない。

本稿は、上記を踏まえ、濱田の政治家生涯に亘る選挙経歴を、選挙制度の改正、特に候補者に多大な影響を及ぼす選挙区制の変化に注目しながら、彼がどのような地域に地盤を築き連続当選を果たしていったかについて考察する。

Ⅰ　大選挙区制時代

濱田が出馬した第７回から第20回までの衆議院議員選挙の選挙区制は、大選挙区、小選挙区、中選挙区と変化したが、本章では、大選挙区制の下で実施された第７回から第13回までの総選挙について検証を加える。この時期の三重県の選挙区割りは、津市（定員１）、四日市市（定員１）、郡部（定員７）であったが、濱田は、郡部から出馬した。因みに、第10回総選挙以降、濱田が多くを集票した宇治山田市は、明治39年度に市政変更により誕生する前は、度会郡宇治山田町であった。したがって、第７～９回総選挙において度会郡より集票した多くは、後の宇治山田市地域での得票であったと考えることができる。

なお、該期間における各候補の郡別得票数は政府公刊資料で確認することができない。したがって、本稿では地元新聞（『伊勢新聞』）に掲載されていた郡別得票数一覧を便宜的に使用する。以下の合計得票数は『衆議院議員総選挙一覧』による。

本章が扱う大選挙区制期は、濱田が地盤を形成していく初期の時代に該当した。以下、各総選挙の濱田の集票状況を確認してみたい。また、得票数・選挙地盤などからどのような人々が支持層であったかについても分析する。

本論に入る前に、大選挙区時代の郡部選挙区の構成を概説しておきたい。当該選挙区は、桑名郡、員弁郡、三重郡、鈴鹿郡、河芸郡、安濃郡、一志郡、飯南郡、多気郡、度会郡、志摩郡、阿山郡、名賀郡、北牟婁、南牟婁と、多数の郡により構成されていた。三重県は南北に長く広がっているため、県内においても生活圏が異なる。一般的に、桑名郡、員弁郡、鈴鹿郡は三重県北部として位置付けられ、愛知県に近いこともあり人口が比較的多い。阿山郡、名賀郡（現：伊賀市周辺）は県内でも異色な地であり、奈良県・大阪府に県境を接することから、関西色が色濃く反映された場所である。宇治山田市（現：伊勢市）以南の志摩郡、度会郡、北牟婁郡、南牟婁郡は、三重県南部に位置付けられており、山地が多いため比較的人口密度が低い。また、古くから農業・漁業が盛んな地域である。後述するが、濱田はこの三重県南部での得票が比較的多かった。

1　第７回総選挙（明治35年）

濱田は明治35（1902）年の第７回総選挙で、定数７名の郡部より無所属で初出馬したが落選した[10]。該選挙では、憲政本党の木村誓太郎が、「木村氏が縣下の最優勢を以て当撰す可し」[11] と報じられるなどし、最有力であった。濱田は、度会郡より604票と最も多くの得票をしている。度会郡の有権者数は、2737人[12] で、同郡の約22％の得票であり、それは尾崎の1177票に次ぐ、第２位の得票である。落選はしたものの同郡を主地盤の１つにしていたことが想像される。この得票の背景には、宇治山田の政友会系組織である公同会[13] に所属していた西田周吉[14] の票が濱田に流れたためと考えられた[15]。地元紙は、西田が濱田を支援したことを次のように分析している。

> 一昨十四日開票せし度会郡衆議院選挙の結果は既報の如くなるが栗原氏の得票は僅々四百五十一票にして公同会派の予期せし約七百票より減ずること実

に三百票なりしが此間の消息に就て伝ふるものは曰く個は間際に至り西田周吉氏が自個の掌中に在りし栗原氏の得票数より三百余票を割きて私に濱田氏に譲りたる結果に外ならず然ればこそ濱田氏の得票は意外に多数なりしとのこと暴露するに至り昨今公同会派中熱心に栗原氏を推したる面々の激昂甚しく遂に西田氏を公同会より除名すべしとまで憤慨し為に容易ならざる内訌を醸しつゝあるよしなるが何れ此問題は公同会派の消長に関する宿痾ともなるべき模様なり（以下略）

このように度会郡での開票結果が判明すると、公同会[16]の栗原亮一の得票が予想より三百票余り少ない数であった。これは、西田周吉が公同会の集票から濱田へ票を横流ししたためと観測されたのである[17]。この動きが明らかとなると、公同会派の逆鱗に触れ、西田の除名処分が検討されるまでに至り、地元新聞でも「公同会の内訌」と題され大々的に報じられた[18]。西田がこのような動きをした要因として、度会商工銀行頭取告発事件が考えられる[19]。地元新聞によると、同行頭取の辻村弥八による横領事件があり、その辻村を操っていたのが、西田の父である西田貞助であるとされたが[20]、その西田貞助を弁護したのが濱田であった[21]。父の弁護を担当したことから西田は恩義を感じており便宜を図ったものと観測された。

濱田は落選に終わったが、表１にみるように、濱田の度会郡からの604票は、尾崎に苦戦を強いらせるほどの得票であった。このことを通じ、尾崎は濱田の実力を認め、二人に親交が生まれたとされる[22]。度会郡以外の濱田の主な集票は、多気郡が335票、飯南郡が475票と、両郡において行われていたことがわかる。これらの地域は、後年も比較的得票が多く、主地盤とはいかないまでも、濱田にとって有力な地盤になる地域である。

他方、表１より政友会の候補者の地盤についてその特徴をみると、平田は三重郡、海野は安濃郡、栗原は一志郡で得票が多く、同じ政友会候補者の中で、得票先には濃淡があることがわかる。大選挙区制下の総選挙ではあるものの、同一政党の中では、ある程度地盤の住み分けがされていた可能性が高い。

２　第８回選挙（明治36年）

明治36（1903）年に開会された第17回帝国議会は、同年に締結された日英同盟が対露脅威を背景にしていたことからも窺えるように、日露戦争前の緊張が高ま

る中で開会された。したがって、第１次桂太郎内閣は、同議会で、軍備拡張のため増税を目指したが、政友会・憲政本党が共に地租増徴断固反対に徹したため、政府は衆議院を解散した。このような経緯の後、明治36年に行われた第８回総選挙であるが、上記の政党による増租反対が民衆から支持されたことに加え、前回の選挙から７カ月しか経過していないことも相まって、政友会・憲政本党間で調整が図られることになる。その結果、両党とも前職優先の方針が採られるに至った。このことは、前回落選し尚且つ無所属であった濱田にとって逆風となった。

加えて、濱田に追い打ちをかける事態が起きる。前回総選挙で濱田の集票に活躍した西田周吉が、濱田ではなく無所属で初出馬した速水熊太郎の支援に回ったのである[23)]。地元新聞は、濱田の陣営を次のように伝えていた。

> 一志の東部、安濃の一小部分、多氣の一部分、南北牟婁の一部分に多少の得票あらんも度會郡に於て参謀を恃みし西田氏を失ひ多氣の根拠は速水氏に殆ど侵略させられたる為め其の勢力範囲に大影響を來せるもゝ如く近來意氣大に沮喪せやるやに噂せり

該選挙を伝える地元新聞の欠落が多いため、選挙状況の詳細を確認することはできないものの、濱田の得票結果を見る限り、西田周吉は濱田への支援をしなかったと推断できる。既述のように前回総選挙において、度会郡で大量に得票できたのは西田の助力によるところが大きく、度会郡から尾崎に次ぐ604票を得ていたが、**表２**に見るように、該総選挙では271票しか得ていない。これは同地域内で、尾崎1277票、栗原477票、速水373票に次ぐ４位に甘んじる成績である。また、前回総選挙において比較的得票が多かった飯南郡と多気郡について見ると、飯南郡は前回の475票から332票、多気郡は335票から240票と、原因は不明ながらも減少している。結果として、濱田は定数７の郡部で10位となり、第７回総選挙での９位より下がる、大敗北を喫することになる[24)]。

なお、前項でも指摘した政友会の栗原、海野、平田の３候補を見ると、表２から見て取れるように、前回総選挙と類似した集票状況となっている。大選挙区制度下とは言え、政友会の三候補の中では、一定の地盤の住み分けが行われ安定した地盤を形成していたことを改めて確認できる。

3　第９回総選挙（明治37年）

明治36年12月に開会された第19帝国議会冒頭、衆議院議長河野広中が、開院勅語に対する奉答文の中に、桂太郎内閣弾劾の意を含む内容があったため議会は混乱し、政府は衆議院を解散することになる。これを受けて実施されたのが、明治37（1904）年の第９回総選挙である。本総選挙において、濱田は甲辰倶楽部[25]から出馬し、最下位の７位ながらも初当選を果たす[26]。

この選挙は、日露戦争中の挙国一致ムーブの中で行われ選挙に対する国民の注目は高かった。しかし、非常時のため選挙活動は控えめであり選挙報道も少なく、地元新聞の選挙月の紙面も欠落している。そのため、濱田が初当選を果たした選挙ではあるが、その選挙戦の内実を窺うことが困難である。**表３**に示す郡別得票を見る限り、濱田は、度会郡より尾崎の722票に肉薄する702票を獲得している。また、飯南郡からは495票、多気郡からは400票とトップの成績を収めていた。これら３郡に共通する特徴としては、農林業従事者が多いことが挙げられる。

また、該選挙は党派問わず新鋭議員は追い風であり、古参議員には逆風であったことが報じられている[27]。地元新聞は、濱田國松、大井卜新、辻寛ら３名の初当選理由について、「是等の候補者に関しては郡部腐敗の状態に省慮せる者もあらん又時勢に鑑みて他日の雄飛に期するものもあらん」[28]と報じている。つまり、民衆は政治腐敗などの現状を憂慮し、政界の刷新を図るべく新鋭議員に投票した可能性が高い。そのため、政友会は、古参議員・海野謙次郎が落選し、甲辰倶楽部に議員数で敗北したといえる。

4　第10回総選挙（明治41年）

第１次西園寺公望内閣の任期満了に伴い、第10回総選挙が行われた。該選挙時に、濱田は尾崎らと共に猶興会[29]に所属していた。選挙の直前に砂糖消費税等の増徴と、石油消費税の新設が成立されたため、増税反対の姿勢をとっていた濱田にとっては追い風となった。

該選挙での大きな変化としては、明治39（1906）年に度会郡の一部であった宇治山田町が市制に移行し、宇治山田市となったことである。宇治山田市は製菓業や旅館業を営む実業家が多く、市内に鉄道（参宮鉄道）が走っていたことを鑑みると、県南部の中では栄えていたといえる。

また、三重県では実業家らによる増税反対大会が行われていたことを地元新聞

は次のように伝えている[30]。

（前略）縣下の實業家は猛然として茲に奮起し所謂増税反対の實業家大會なるもの　　豫記の如く昨日午後一時半を以て當氏曙座に於て開會せられたり來會者は四日市三十五人、山田十五人、桑名十人、上野十五人、松阪五人を初めとして當市の實業家無慮一千餘名發起人總代として（中略）濱田國松、永濱出兩氏の祝電を朗読し茲に一應同會の式を終り直ちに非増税の大演説に入れり

事業家1000人余りが発起人となったとあるように、非常に大規模な活動であったことが窺える。宇治山田市からの参加者は四日市市に次いで多かったのは、宇治山田市が製菓業の多い土地柄であることに起因していたためであろう。また、宇治山田市の出席者の中には、山田銀行を創立した村井恒三など地元の名士らも多数出席していた[31]。

この増税反対大会では、増税に賛成する代議士を選出しないことが決議された。伊勢新聞によると三重県出身の代議士のうち、尾崎行雄（又新会）、大井卜新（政友会）、辻寛（無所属）、栗原亮一（政友会）、海野謙二郎（政友会）、森茂生（政友会）ら６名が増税に賛成であり、反対派は松本恒之助（憲政会）、濱田國松（猶興会）、三輪猶作（甲辰倶楽部）の３名のみであった。そのため、濱田にとっては追い風となったことが推察される。

このように、増税反対の立場をとり事業家の支援を受け、当選が確実視された濱田であった。しかし、片岡直温の出馬[32] により事態は急変する。片岡は高知県出身の人物であるが、宇治山田市に路線を持つ参宮鉄道の社長を務めていた。そのことから、三重県に人脈があり、落下傘候補として出馬してきたのである。片岡は、一志郡、飯南郡、多気郡、度会郡に地盤があると報じられ[33]、立候補するや否や当選確実と目された[34]。また、片岡の出馬は濱田だけでなく、尾崎を含む郡部すべての議員にとって非常に大きな痛手となったことが報じられている[35]。**表４**の片岡の郡別得票を見ると員弁郡で974票獲得している。これにより、森茂雄は員弁郡より前回から211票減少して631票であり、他候補の票を浸食したことが分かる。

その結果、濱田は追い風であったにもかかわらず、尾崎より１つ下位の４位当選に終わった[36]。しかしながら、表４に見るように、宇治山田市からは最大得票

の394票を獲得し[37]。尾崎行雄205票、栗原亮一201票を大きく引き離していた。また、度会郡では1292票（1位）、飯南郡791票（1位）と好成績を収めた。次回以降の選挙でも宇治山田市で得票していく。これらのことから該総選挙は、濱田の地盤固めの方向性を確定する転機になったと考えられる。

5　第11回選挙（明治45年）

第11回総選挙は第二次西園寺公望内閣の下で行われ、宇治山田地域では格別大きな争点もなく終了した。濱田はこの期間中に、立憲国民党へと所属を移すことになる。

後述するが、該選挙では御木本真珠の創設者である実業家の御木本幸吉の助力を得ることになる。その恩恵は大きく、志摩郡より前回の221票から675票と大躍進を果たした。また、**表5**が示すように、志摩において最多得票を果たした。以降濱田派は、志摩方面への拡張に成功し、選挙地盤を築いていくこととなる。志摩は農業・漁業が古くから盛んな土地であり、この地域における支持者は農業・漁業従事者が主であった可能性が高い。

立憲国民党は民力休養路線であり、前回選挙で増税反対をとった濱田と政治志向が合致していた。三重県選挙会においては、伊山方面[38]で、立憲政友会所属の有力な代議士であった大井卜新[39]が引退を表明したことが、立候補者たちに大きな動揺を与えた[40]。大井は、初出馬の梅原亀七[41]を推挙し、地盤を譲渡する形での引退だったことが報じられている[42]。濱田や尾崎らは宇治山田方面を主地盤とする候補者であったが、この機を逃さず、伊山方面への進出を目指し遊説を試みたのである。

しかし、選挙戦が始まると、伊山方面は当初予想されていたような混戦とはならなかった[43]。梅原は濱田らの攻勢で自分たちが不利と見るや否や伊山方面を放棄し、宇治山田・志摩方面で運動を開始したためである。そのため、予想に反し宇治山田・志摩方面が混戦となった。

こうした状況下、該選挙で濱田は初のトップ当選を果たしたが[44]、それは、複数の要因が重なったことが考えられる。はじめに、地域の有力者を複数味方につけたことである。志摩方面では、御木本幸吉ら地元有力者を味方につけていた[45]。飯南方面では、林業で財を成した地方名望家の堀内鶴雄[46]らを味方につけていた。こうした事情もあり濱田は、選挙戦の早い段階から当選確実と予想されたが[47]、実際に表5からも見て取れるように、飯南郡で2位（845票）、志摩郡で1

位（675票）と好成績を収めている。次に、該選挙では、有力な対抗馬がいなくなったためである。前回選挙時の片岡直温のような参戦者もおらず、宇治山田選挙区において尾崎と並ぶ、立憲政友会所属の古参議員であった栗原亮一は選挙前年に死去していた。さらに、尾崎も演説が振るわないとの不調が報じられた[48]。事実、表４・５から窺えるように、尾崎は度会郡において前回1292票で最多得票であったが1182票と票を減らし、濱田の1288票の後塵を拝し２位となっている。加えて、濱田は宇治山田市内の政治団体である神都倶楽部とも提携し、同市内の票の大多数を掌握していたこと[49]が要因として挙げられる。事実、前回の246票（候補者中３位）から622票（候補者中１位）へと大きく票を伸ばしている。さらに前節でも言及したように増税反対の立場をとったことが地盤獲得につながったとみて良いだろう。

6　第12回選挙（大正４年）

大正４（1915）年の第12回衆議院総選挙は、第二次大隈重信内閣の下で行われ、全国的には政友会が大幅に議席を減らした選挙である。しかしながら、詳細は不明であるが宇治山田の政界においては、当初、野党である政友会が有利であると目されていた[50]。

そのため、立憲国民党に所属していた濱田は苦戦を強いられることとなり、尾崎とは4000票強の差を付けられての４位当選に甘んじることになる[51]。もっとも、表６に見るように、宇治山田市だけの票数に着目すると、尾崎が471票獲得したのに対し、濱田は441票であり、その差はわずかに30票と健闘している[52]。宇治山田市の選挙界で存在感を示したといえた。他方、前回選挙で得票が多かった地域についてみると、志摩郡では前回675票（１位）から212票減の463票（１位）、度会郡では前回1288票から405票減の883票（２位）、多気郡では前回522票（２位）から205票増の727票（１位）、飯南845票（１位）から288票減の557票（３位）、と地域内での優位は保ちつつも得票を総じて減らしている。このことから、濱田の主地盤は盤石ではなかったことが窺える。

7　第13回選挙（大正６年）

本選挙年の伊勢新聞は誌面が欠落しているため、郡別の集票状況を確認することができず、本節では選挙の得票数のみ掲載する。前回同様、国民党より出馬した濱田は定員７名中３位当選と上位に食い込んでおり、着々と実力をつけていた

と言える[53)]。

小　括

本章では、大選挙区制時代における濱田の地盤獲得状況について論じてきた。濱田は、増税反対を機に宇治山田市に進出したといえる。また、第11回選挙以降では志摩郡や飯南郡での得票を伸ばしていく。宇治山田市は製菓業や旅館業が盛んな地域であり、支持層は実業家が主であった可能性が高い。志摩郡や飯南郡は農林水産業が盛んな地域であり、それら第一次産業従事者であった可能性が高い。しかしながら、未だ選挙は得票数・当選順位の面で安定にかけ、宇治山田市での地位を確立するのは後述する小選挙区制期以降である。

Ⅱ　小選挙区制時代

大正８（1919）年に選挙法が改正され、選挙権が「満25歳以上、直接国税３円以上を納める成年男子」に引き下げられると同時に、小選挙区制が導入された。これにより三重県選挙区は、１区（定員１、津市）、２区（定員１、四日市市）、３区（定員１、宇治山田市）、４区（定員１、安濃郡・一志郡）、５区（定員２、鈴鹿郡・河芸郡・三重郡）、６区（定員１、員弁郡・桑名郡）、７区（定員１、飯南郡・多気郡）、８区（定員１、度会郡・志摩郡）、９区（定員１、北牟婁郡・南牟婁郡）、10区（定員１、阿山郡・名賀郡）と、定員２名の５区と、定員１名の９つの選挙区、合計10の小選挙区に分割された。

濱田は、該期間において、大選挙区時代に比較的得票数が多かった度会郡・志摩郡からなる第８区ではなく、宇治山田市の第３区から出馬した。宇治山田市は、第10回総選挙での増税反対以降得票を伸ばした地域であるものの、度会郡・志摩郡に比して得票において及ばない地域であった。８区でなく２区に回った要因として、前者からは当時濱田と同じく立憲国民党に所属していた尾崎行雄が出馬することとなったことが挙げられる。事実、『伊勢新聞』は両者間で地盤分けに関するやり取りがあったことを報じている[54)]。

１　第14回総選挙（大正９年）

該総選挙は政友会を与党とする原敬内閣下の選挙であり、全国的には政友会が大勝した選挙である。三重県選挙界においても政友会議員の優勢が度々報じられ

た[55]。

既述のように濱田は、宇治山田市を独立の選挙区とする第三区より出馬した。宇治山田市は、大選挙区時代に濱田が自らの地盤を養成しつつあった地域であったことは既に指摘している。そして、この選挙期間、濱田は西田周吉への政治工作に終始注力することになる。詳細は不明であるが、西田が宇治山田市から出馬表明したためである。西田は、当選経験こそなかったものの、県会議員を務めていた宇治山田市の有力者であり、出馬すれば濱田との対立は必至であった。濱田は選挙活動が本格化する以前に、西田を県会議議員議長に推挙することを持ち掛け、出馬を辞退することを迫ったのである[56]。結果的に、西田はその提案を受け入れ、出馬を辞退する運びとなり、地元新聞紙上においても断念することが報じられた。

濱田は選挙区に有力な対抗馬がいなくなったことにより、当選確実かと思われたが、水を差す事態が起こる。市会議員の國府重周[57]（無所属）の出馬表明である。これには紙面も、「久しく獨占の夢圓なりし濱田氏の狼狽一方ならず」と報じている。さらに、濱田に追い打ちをかけるように、一反は出馬辞退を内諾したはずの西田の出馬表明が改めて報じられることになる[58]。西田が立候補すると、西田と國府の鼎立となり、濱田の落選は確実と目されていた[59]。そこで、濱田は改めて西田を招き会談を行い[60]、再度西田の辞退を取り付けるに至る。その結果、選挙は濱田と國府の一騎打ちとなった。濱田はその際、有権者の同情を得るべく、積極的に選挙活動を行ったことが報じられた[61]。

> （前略）國府派の奮戦いたる處猛烈にて川崎[62] 船江[63] の如き同派の占領する所なるや濱田軍の狼狽極度に達しお大自ら田崎の事務所を本陣として進めと下知されども國府の舌戦に於て獲得したる領土なれば容易に奪取さるべくもあらず夜に入りて空しく退陣の餘義なきに至りしが同派が國軍の故智に倣ひ子息幹君の妻女を應援せしめ「お父さんを助け玉へ」と各戸に叩頭せしむるに至り（中略）伊勢毎日新聞を以て國府氏の人身攻撃を盛にかきしめし（後略）

上記の選挙観測からもわかるように、國府の奮戦によって濱田が相当困惑していたことが窺える。追い詰められた濱田らは、知恵を絞り自身の家族を使った訪問活動に加え、『伊勢毎日新聞』[64] を使い宣伝工作を敢行したことも伝えられて

いる。これには伊勢新聞も、「其心事の陋劣なる寧ろ気の毒の感あり」[65] と、濱田に対しやや厳しい意見をよせている。しかし、濱田は上記報道に反し、國府に圧倒的大差をつけ当選を勝ち取ることになる[66]。大選挙区制から小選挙区制への移行は、主地盤を尾崎に譲ることになるものの、大選挙区制時代に養成しつつあった地域の選挙区からの出馬であったため当選を果たすことができたといえよう。

2　第15回選挙（大正13年）

大正13（1924）年、清浦圭吾を首班とする貴族院中心の内閣が誕生する。第15回総選挙は、その賛否をめぐり政友会が政友本党と分裂する中での選挙となった。清浦内閣を非立憲と攻撃する第二次護憲運動が巻き上がり、清浦批判を鮮明にした、憲政会、政友会、革新倶楽部の三党は護憲三派として持ち上げられ追い風が吹き、それとは対照的に清浦内閣の与党と目された政友本党には逆風が吹く選挙となった。宇治山田の選挙界もその例に漏れず、政友本党に所属していた西田には逆風であったことが報じられている[67]。本選挙は革新倶楽部の濱田と政友本党の西田周吉との直接対決となった。詳細は不明ながらも、前回選挙のように西田との間に合意を取り付けようとした濱田であったが、失敗したことが報じられている[68]。

地元新聞の観測記事からは、濱田が当時同じく革新倶楽部に所属していた尾崎行雄に応援演説を頼むなどし、相当早くから選挙活動を開始したことが看取できる。しかし、活動を始めるのが早すぎたことが仇となり、勢いを失い劣勢に立たされていた[69]。濱田は該選挙で敗れると、西田に第３区の選挙地盤を奪われ、政治家生命が断たれるため、「決死的態度」[70] で臨んだ。対する西田は、「関係的地盤を基礎として或いは商工会方面所得税調査委員方面或いは旅館料理店方面」へ働きかけたため、濱田に痛手を与えていた。また、新聞の選挙観測からは、２人の対決は市民らの注目を相当程度集めていたことが窺える[71]。

選挙戦は日を追うごとに加熱していった。三重県は選挙取り締まりの都合上、各選挙区の運動員に人数制限を設けたが、両陣営は応じかねるとして百数十人ずつの運動員が入り乱れ、警察が出動する事態にまで発展した[72]。西田は自身が政府与党に所属していることを武器に言論戦を展開し、濱田はポスターや書簡運動でこれに対抗した。両者の勝敗は「三十票乃至五十票の際ドイ決戦」[73] になるであろうと予想されていた。また、両者の演説は過激であり、「得意の揚げ足取り

を初め醜陋なせんじの交換」[74] と評されるほどであった。選挙は投票日前日にかけてさらに過熱していくこととなり、濱田は尾崎に計７回の応援演説を依頼している。濱田と尾崎は大選挙区時代において主地盤を競合した仲であったが、小選挙区制に移行したことで、尾崎が度会郡（三重県第８区）に、濱田が宇治山田市（第３区）へと地盤分けが成立したことから、このような協力関係に至ったと考えられる。

濱田と西田の競争は、熾烈を極めていった。濱田派の青年らが、西田の選挙事務所を包囲し歓声を上げているところへ西田派の自動車が突進する光景や、夜を徹して自動車・人力車が行き交い、投票日には両派の運動員・青年有志らあわせて800名が「一斉に有権者の門戸を叩いて狩り出し」を行っていた[75] と報じられたほどである。

投票が始まると、西田が僅差で勝利するとの見込みが報じられた。しかし、蓋を開けると、濱田1249票に対して西田592票と予想以上に票数の差が開いていた[76]。伊勢新聞はこの結果に対し、「尾崎氏の舌端火を吐くやうな而して何物をも感激せしめねば止まない明快な雄辯に依りて同市民の時代的自覚を選挙心理に呼び起こした事を見逃すことは出来ない」[77] と評し、尾崎行雄の功績によるところが大きいと締めくくっている。

第８回総選挙での初当選以降、宇治山田地域で地盤を築いてきた濱田であったが、この選挙で西田を圧倒したことにより、同地域を自らの主地盤として盤石なものにできたといえる。

小　括

本章では、濱田と西田の地盤衝突に重きを置いて論じてきた。西田は第７回総選挙において濱田を支援した度会郡・宇治山田市の有力者であったが、第８回総選挙では別候補の支援に回った。このことが、両者に深い溝を作り、直接対決につながったと考えられる。前章で宇治山田に地盤を築きつつあった濱田であるが、地盤を確立できたのは西田を制した当該期間であることが確認できた。さらに、小選挙区制であったため、有力候補尾崎との地盤衝突を避けられたのみならず、助力を得られたことが非常に大きかったであろう。地元新聞の報道に鑑み、その知名度は尾崎には遥かに及んでいなかったものの自らの選挙地盤を確実に養成していたことを確認できる。

Ⅲ　中選挙区制時代

大正14年に改正衆議院議員選挙法が制定され、男子普選が実現した。これにより、三重県では有権者が大幅に増加することとなる。男子普選前の第15回総選挙と普選後の第16回総選挙とで三重県全体の有権者数を比較すると、13万6550人[78]から約2.8倍の39万272人[79]となった。三重県の選挙区は定員５名の１区（津市、四日市市、桑名市、上野市、鈴鹿市、桑名郡、員弁郡、三重郡、鈴鹿郡、河芸郡、安濃郡、一志郡、阿山郡、名賀郡）と、定員４名の２区（宇治山田市、松阪市、飯南郡、多気郡、度会郡、志摩郡、北牟婁郡、南牟婁郡）と、２つの選挙区に統合された。

濱田は、後者の２区から出馬することになるが、これらの地域は濱田が大選挙区制時代、濱田が集票をした地域を包括する選挙区であった。また、この三重県２区は、選挙区の統合に加え、男子普通選挙実現により、有権者の増加が著しい選挙区であった。第15回総選挙と第16回総選挙とで比較すると、宇治山田市では1962人から9267人、飯南郡では6734人から１万9463人、多気郡では4535人から１万670人、度会郡では7438人から２万1627人、志摩郡では3899人から１万5261人、北牟婁郡では1594人から9310人、南牟婁郡では3906人から１万1732人[80]と、顕著な増加が見られた。この有権者の増加から窺えるように、比較的所得が低い農林水産業従事者が多かった可能性が高い。

該選挙期間は、第16～18回総選挙までは、昭和初頭の二大政党政治の時代の選挙、第19～20回総選挙は、五・一五事件により政党政治が終わりを迎え、選挙の粛清が唱えられる中での選挙であった。

次に、該期間の濱田の所属党派の遍歴を確認しておくと、既述のように彼は、犬養毅と行動を共にし、立憲国民党に所属していたが、同党は大正11（1922）年９月11日に解党することになる[81]。その後、同年11月８日に革新倶楽部として再結集するも振るわず、大正14（1925）年、犬養とともに濱田は政友会に合流することになる[82]。

なお、前章において紹介したように濱田は、既に宇治山田市の地盤を獲得していた。しかしながら、この時期の濱田の宇治山田での得票順位は安定しておらず、１～３位の間を揺れ動いていた。要因としては、池田敬八や長井源などの新参議員の活躍が目覚ましかったことが挙げられる。一方、志摩郡では定的に１・２位の好成績を収めていたことから、濱田のこの時期の主地盤は志摩郡であった可能

性が高い。

1　第16回総選挙（昭和３年）

政友会を与党する田中義一内閣の下で実施された該総選挙であるため、濱田は与党候補者として選挙を戦うことになる。もっとも、上記に説明したように犬養率いる革新倶楽部からの合流であるため、明治以来の政友会の地盤を養成してきた候補ではなかったことは注視すべきであろう。定数４名の２区で政友会候補２名が立候補していることから党内の候補者調整はうまくいったと考えられる。しかも、もう１人の候補者の安保庸三[83]は「松阪町驛前に本陣を置してゐる」[84]との報道があり、飯南郡[85]に拠点を置いていた可能性が高い。安保は飯南郡より4234票と集中して得票している[86]ことから濱田との住み分けはできていた。地元新聞の選挙戦当初の観測によれば、「物凄い程の静けさ」[87]を見せていた。濱田と尾崎の遊説があるのみで、他の候補者たちが動きを見せなかったためである。しかし、立憲民政党から初出馬の池田敬八による遊説が開始されたことにより、選挙活動が本格化することとなる。

三重県南部では宇治山田市を中心として選挙活動が白熱化し、「各派の言論戦と文書戦はまんじ巴となって火花を散らし大分凄惨の氣」を帯びていた[88]。注目すべきは、「濱田派の演説會には珍しくも聴衆から野次が飛び場内は大いに緊張氣分を見せた」と報じられていることである。濱田は弁論に優れ、時に紙面では「魔舌」と表現されるほどになっていた。そのため、野次が飛ぶのは非常に稀だったのである。

濱田は大選挙区時代において、宇治山田市のほかに飯南郡・度会郡・志摩郡での得票が多かった。しかしながら、該選挙では飯南郡での得票は多くなかったが、これは既述のように飯南郡出身の同一政党政友会の安保との住み分けができていたためであろう。安保は人脈・地縁を元に同郡から大量得票したと考えられる。また、本選挙においては、対立政党である野党民政党候補の池田敬八の活躍が目覚ましく、濱田が地盤とする宇治山田市で相当な支持があり、濱田の1290票（３位）に対し池田は3213票（１位）と倍以上の得票をしているので[89]、濱田はこれまで地盤を築いてきた宇治山田市の地盤を崩され得票を減らしたと推察される。このような飯南郡・宇治山田市での集票減とは対照的に、郡別の集票状況をみると、志摩郡から3551票と最多得票し、同郡２位の尾崎の2633票を大きく引き離している。結果から見ると、志摩郡での地盤が強固になりつつあったことがわかる。

結果として、野党民政党で逆風が吹いていたはずの池田が知名度の高い尾崎をも抑えてのトップ当選を果たし、濱田は、池田、尾崎に次ぐ3位当選に終わっている[90]。

2　第17回総選挙（昭和5年）

浜口雄幸内閣下で実施された該総選挙は、民政党を与党としていたため政友会候補は野党候補として戦うことを余儀なくされ、逆風下の選挙となった。濱田や尾崎をはじめとして、第2区から立候補者した9候補のうち6名は、宇治山田市および度会郡を拠点とする候補と目され[91]、「政戰愈々白熱化し各候補は凡有秘策を盡して奮戰力闘」の様相を呈した。該選挙では、前回選挙において野党候補であったにもかかわらず最多得票を果たした民政党の池田敬八の動向が特に注目された。池田の陣営は「假令石に嚙じり付いても不手際な當選はさせたくない」[92] という空気が流れ気合十分であるなど、度々池田に関する報道がなされた。与党の追い風に乗り、民政党からは3名の候補が立ったことにより党内の競合が激しかったためと考えられる。また、前回は北牟婁郡で多くの票を得た池田であったが、北牟婁郡に支部を置かず、宇治山田市に本部を置き、松坂町と多気郡に拠点を置いた。民政党候補者間で、住み分けがある程度行われたことが窺われる。既述のように宇治山田市は濱田も地盤を置くところであり、宇治山田市での選挙活動は熾烈を極めることになる[93]。

結果として、濱田は宇治山田市では得票数を伸ばすことができず、池田の2280票、牛場の2023票、尾崎の1838票に大きく離され1343票に留まった[94]。他方、志摩郡の得票は3303票と地域内2位の池田の2230票を1000票以上引き離しての最多得票だった[95]。前回選挙でも志摩郡では最多得票であったことを鑑みると、志摩郡を主地盤として固めつつあった。当選順位は1位の尾崎に5500票以上引き離されての2位であった[96]。

3　第18回総選挙（昭和7年）

本総選挙は、満州事変の処理が一段落した後に行われた。そのため、地元新聞の言葉を借りると「支那事変の為に興をそがれて居るのと一般に候補者の軍資金が豊かでないので政戦は頗る地味」[97] であった。犬養毅内閣下で実施された総選挙であるため、政友会は政権与党として臨み大勝した。

与党に吹いた追い風は、三重県第2区にも及んだが、しかしそれは政友会候補

者の乱立が予想される状況を生み出すことになる。地元新聞によれば、１月21日段階で、定員４議席のところ、政友会からは濱田以外に、浜地文平[98]、石原圓吉[99]、別當好平[100] の４名が公認の有無を問わず出馬表明することが報じられた。

候補者乱立は、濱田にとっても他人事ではなかった。濱地と石原の両名が出馬した場合、「従來強固な地盤として培ふて來た所が四分五裂して濱田氏を窮地に陥れる事となる」と観測されていたからである。政友会首脳部としては、濱田を当選させるべく、石原・浜地の出馬を取り下げさせるべく説得作業が行われたようである[101]。

こうした政友会内部での地盤衝突を「鎮壓」すべく、２月４日には加藤拓務政務次官らが来県した。４人は石原、濱田、濱地らの元をめぐり慰問し、濱地には出馬を辞退するよう勧告した。また、政友会の宮田支部長も濱地に対し辞退するよう勧告した。その結果、２月４日夜濱地は出馬断念を表明した。この一連の政友会陣営の地盤衝突は、民政党陣営に隙を与えるため、動向が注目されたのである[102]。また、報道はなされていなかったが、この後に石原も出馬を取りやめている。結果として、政友会からは濱田と後藤修の２名が立つことになる。後藤は飯南郡から6144票と大量得票し３位当選を果たしていたことからも窺えるように[103]、政友会の候補者の絞り込みと濱田との住み分けはできていたと考えることができる。これとは対照的に、民政党は野党で逆風下の戦いであるにもかかわらず、３名の候補が立ち候補者の調整は必ずしもうまくいっていなかったことがわかる。

該選挙は、先述してきたように満州事変処理後に行われ、本来は与党の風が吹くはずであったが、むしろそれに乗じ出馬を目指す者が増え、選挙戦当初は政友会候補の乱立が予想され、濱田は不利と目されていたが[104]、その後候補者調整がうまく行われたため、開票が始まると濱田は圧倒的優勢であった[105]。宇治山田市では前回の1343票から600票以上票数を伸ばし、1950票得票した。これは同市内において池田敬八の2232票に次いで２位の好成績である。また、志摩郡では前回の3303票から1000票以上票を伸ばし4674票で最多得票している[106]。これは第16回総選挙から通算３回連続の最多得票であり、地盤が盤石になっていたことがわかる。

また、特筆すべきは南牟婁郡と北牟婁郡で最多得票を果たしたことである。南牟婁郡では前回の1089票から2700票近く伸ばして3756票得票し、北牟婁郡でも前回の1347票から1000票近く伸ばして2325票得票した。両郡では中選挙区制移行後

かつてない好成績であった[107]。地元新聞は関連報道を行っておらずその理由は不明であるが、２月４日に浜地、２月12日に別當が出馬辞退したことで、政友会内での候補者の絞り込みが行われた成果と見なすことができよう。これは、宇治山田市における選挙地盤の衝突をも回避することになる。結果として、濱田は、２位の尾崎に4000票以上差をつけての１万9960票でトップ当選を果たす[108]。

４　第19回総選挙（昭和11年）

該選挙は、五・一五事件で政党政治が崩壊し非政党内閣の岡田啓介内閣下で実施された。昭和初頭に政友会、民政党の二大政党による政権交代が行われた時代であったが、政治や選挙の腐敗が問題視され次の第20回とともに粛清選挙が高唱された選挙であった。

三重２区は、１月１日の時点で、定員４名のところに２倍強である９名の出馬が確実との予測が報じられたように[109]、早くから全国的な激戦となることが予想されていた。また、この選挙でも尾崎の当選は早くから確実視されていた。「定員四名とは云ひ條、萬年議員尾崎咢堂氏が出てゐるので事実上の定員は三名」[110]程であるとの報道は、それを物語っていた。当時、濱田は当選10回を数え、現役で衆議院副議長を務めるほどの有力議員となっていたが、地元の選挙区である２区においては尾崎の後塵を拝する存在であったことが読み取れる。

既述のように本選挙は熾烈を極め、とりわけ宇治山田市での競争が激しかった。当市には、尾崎、濱田、浜地、角の４名が拠点を置いていたためである。ただし、地元新聞の選挙観測によれば、濱田は尾崎とともに「二大巨頭」とも表現され、当選が確実視されていた。

また、本選挙の特徴として、政友会・民政党の議席争いが苛烈であったことが挙げられ、どちらの所属議員が多く当選するかが注目された。加えて、民政党から初出馬の長井源[111]が関心を集めた。出馬当時の長井の経歴は、高等文官試験合格、弁護士、松阪市会議員、三重県県会議員、第33代三重県会副議長[112]と錚々たるものだった。このように該選挙では、党同士の争いに加え新進気鋭の候補者が注目される中で、濱田の選挙活動の詳細はあまり報道されなかった。それは選挙結果にも看取できて、濱田は、１位の尾崎と２位の長井に大差を付けられての３位当選に甘んじることになる[113]。初出馬の民政党長井が好成績を収められた要因は、前述した華々しい経歴によって飯南郡から7853票と大量得票し[114]、同郡から強い支持を受けていたことがわかる。

該選挙における濱田の集票状況において、特筆すべきは志摩郡での大幅な得票減である。前章で言及したように、濱田は中選挙区制移行後、志摩郡で３回連続最多得票を果たしてきた。しかしながら、該選挙では前回から3000票以上減らし1141票であった[115)]。その原因は、同じ政友会から初出馬した石原圓吉の影響であることは集票結果から明らかであった。石原は志摩郡から5034票と圧倒的な得票をしていたが、彼は三重県会議員長を務め、水産振興・漁港整備に尽力した人物である。そのため、漁業関係者が多い志摩郡民から強い支持を集めたものと推断できる。濱田は志摩郡では得票を減らす一方で、宇治山田市では前回の1950票から1000票近く伸ばし、2992票獲得している[116)]。前回選挙において宇治山田市で最多得票を果たした池田敬八が立候補しなかったためと考えられる。

さらに、濱田に関して注目すべきは、宇治山田市だけでなく、度会、北牟婁、南牟婁でも多く得票したことである[117)]。度会郡は濱田の出身地であり、かつての地盤であるため好成績だったのは肯ける。しかしながら、北牟婁と南牟婁に関しては、地縁がなかった。濱田に関する地元新聞の選挙報道も少なかったため、好成績を収められた理由は不明であるが、同地域を地盤とする政友会系候補の出馬がなかったことに加え、北牟婁郡・南牟婁郡の両郡は田園地帯であるため、濱田の民力休養的な政治志向が受け入れられたのではないかと考えられる。

5　第20回総選挙（昭和12年）

林銑十郎内閣が予算成立後に所謂「食い逃げ解散」を行った。そのため、既成二大政党の反発は大きかった。そして、政民両党連携機運もあり、両党は一定の成果を収めた。

冒頭に紹介したように、この総選挙が実施された同年１月、広田内閣を倒閣に導く契機となった「腹切り問答」により、濱田は全国的な知名度を獲得することになる。地元新聞も、号外で「腹切り問答」を濱田の写真を交えて大々的に報じている[118)]。地元選挙区でも注目される中央政界で活躍する濱田の姿であった。しかしながら、濱田は最下位当選に甘んじることになる[119)]。直接の原因は不明だが、政友会から濱地文平、田村稔、別當好平が出馬し、合計４名の候補が立つ、候補者乱立が一因であったことは明らかであろう。中央政界が注目された腹切り問答は、三重県選挙界においては候補者乱立の逆風を吹き飛ばすほどの力はなかったことがわかる。そもそも該総選挙における、地元新聞の濱田に関する報道自体が希薄であり、詳細が窺い知れない状況であった。報道の主力は長井に向け

られていた。

該選挙では、三重県第２区からは定員４名のところに７名が立候補した。既述のように政友会系が乱立する選挙であったが、地元新聞報道は、党派間の争いではなく尾崎・濱田の古参議員と新鋭議員の選挙合戦の点に注目する報道が行われた。「古豪流石に強し……との情報あるかと思へば次には新鋭の切先侮り難しとの通報飛び、この區は随所につばぜり合ひの白熱戦が展開してゐる」との報道が典型であり[120]、選挙の激戦ぶりをうかがい知ることができる。連続当選20回という連続当選レコード保持者の尾崎は、紙面において「別看板」[121]、「猿が木から落ちることはあり得ても翁の当選に？符をうつものはいつてもよい」[122] と評されるほど格別視されていた。

本選挙における濱田の苦戦の要因として、度会郡での大幅な得票減少が考えられる。前回の2244票から2011票に減少した[123]。飯南郡においても、第18回総選挙では1802票、第19回総選挙では1375票獲得していたにもかかわらず、本選挙では792票しか獲得できていない[124]。減少の原因としては、前回の第19回選挙から出馬している民政党候補長井源の存在が挙げられる。長井は飯南郡出身の人物であり、前回選挙で地盤固めに成功していた可能性が高い。次に考えられるのが、志摩郡の地盤競合である。濱田は第16回総選挙から第18回選挙まで最多得票を果たし、平均3700票程度得票してきた。ところが、前回選挙においては志摩郡の名士・石原圓吉の出馬により1141票まで下落、該選挙でも2293票までしか得票は戻っていない[125]。このように濱田が伸び悩む一方で、濱地が前回の550票から2085票に大きく伸ばしており[126]、濱地が濱田の隙をついて地盤を奪取した可能性が高い。これらの結果、濱田の得票減につながり、最下位当選に終わったと考えられる。

小　括

本章では、濱田國松の中選挙区期の選挙結果について見てきた。濱田は、この期間にはすでに確固たる地位を確立し、当選確実級の議員にまで成長を遂げていた。しかしながら、主地盤としてきた宇治山田市での得票は安定せず、むしろ志摩郡で得票数を稼ぎ、同地域での地盤を固めることになる。しかし、この志摩郡の地盤も、地元有力候補者が出馬すると喰われてしまう現実を確認できた。また、「腹切り問答」は、彼を全国的に知名度のある政治家に押し上げたにもかかわらず、選挙に際しては地元の縁の強さに打ち勝つほどの効果をもたらしていなかっ

たことが確認できた。

結　語

本稿では、腹切り問答で有名となる濱田國松が地元選挙区でいかに地盤を築きながら、12回連続当選を果たすことができたか、その軌跡を追ってみた。

第Ⅰ章・大選挙区制期（第７回～第13回総選挙）では、濱田の郡別得票数および当選順位から、該期間における濱田の選挙地盤は盤石ではなかったことが確認できた。しかしながら、第10回総選挙で増税反対の姿勢をとったことは宇治山田市の実業家らの支持につながり、地盤固めの契機となっていた。加えて、第11回総選挙では、ミキモト真珠を立ち上げた御木本幸吉の助力を得られたことは大きく、志摩郡での地盤獲得につながっていた。

第Ⅱ章・小選挙区制期（第14・15回総選挙）では、濱田が宇治山田市での地盤を盤石なものとしたことを確認した。濱田は地元名士・西田周吉を第15回選挙で圧倒し、宇治山田市選挙界でその実力を知らしめたからである。

第Ⅲ章・中選挙区制期（第16回～20回総選挙）では、濱田は当選確実級の議員へと変貌を遂げたにもかかわらず、地盤が定まらなかったことを確認した。小選挙区制期で地盤が固まったかに見えた宇治山田市で得票を稼げなかった。古参の尾崎行雄や新鋭の池田敬八に喰われてしまったからである。志摩郡での得票が最も安定していたが、それも地元有力者が立候補するとたちまち喰われてしまった。

また、濱田の選挙地盤養成過程で見えてきたことは、尾崎行雄級の全国的知名度のある政治家を除き、確固たる地盤を確立することが困難であったことである。候補者たちは、選挙制度、とりわけ選挙区制の改正により、その都度地盤の再構築の必要性を余儀なくされている。さらに、「腹切り問答」が実際に選挙結果に結びつかなかったことに示されるように、中央政界で脚光を浴びても得票につながらなかったことが分かる。むしろ、地元有力者の支援・同一政党内での競合者の有無、主地盤における競合政党候補者の勢い等、地元政界の影響が選挙結果を大きく左右していたことが分かる。

濱田が連続当選できた要因を政策面から見てみると、選挙地盤の土地柄に即した提案してきたことがあげられる。濱田は、自ら所属する国民党の主たる政策である廃減税、増税反対を訴えたが、これは濱田が主地盤とする宇治山田市が実業家の多い地域であったことに呼応していた。第10回選挙で増税反対の姿勢をとっ

たことで、御木本幸吉などをはじめとする有力実業家の支持を受けることになったのは、その象徴であろう。また、濱田は、度会郡、志摩などの農業・漁業が盛んな地域に地盤を置いていた。紙幅の関係から言及することはできなかったが濱田が男子普選を前にして小作法の必要を訴えていたのは、普選の導入とともに、そうした地盤を意識しての政策提言であった。

このように濱田は自らの選挙地盤に連関する政策を訴えていたが、それが彼の集票にどこまで貢献したかは慎重な検討が必要であろう。「腹切り問答」に関して、地元新聞は号外と共に大々的に報じ[127]、翌日には特集を組んだことから[128]、同郷の濱田の活躍は喜ばしいものであったことが窺える。しかしながら、このように全国的に知名度が上がったにもかかわらず、その選挙結果は奮わなかった。濱田の選挙経歴と地盤形成を通観すると、政策や全国的に注目される出来事より、地元有力者の支持の有無、競合する地元有力者の出馬の有無などが選挙結果に決定的に影響を与えていたことが示さていた。

濱田は、彼にとって最後の選挙になる第20回総選挙実施２年後の昭和14年（1939年）に亡くなることになる。その死は地元新聞で大々的に惜しまれ報じられた。

図１　三重県の旧地名

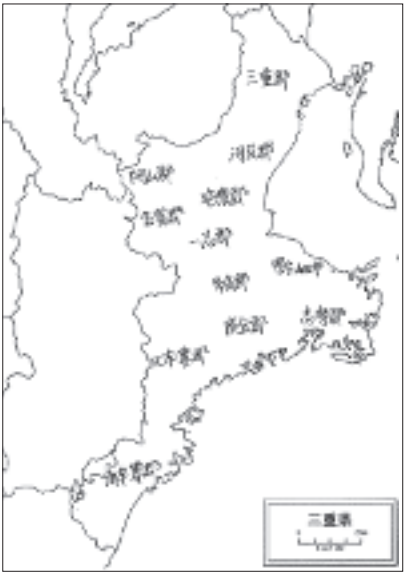

表１　第７回衆議院総選挙三重県郡部・郡別得票数一覧

（『伊勢新聞』明治35年８月15日朝刊２面）

地名／人名	桑名郡	員弁郡	三重郡	鈴鹿郡	河芸	安濃郡	一志郡	飯南郡	多気郡	度会郡	志摩郡	阿山郡	名賀郡	北牟婁郡	南牟婁郡	合計
木村誓太郎	403	911	776	234	811	1	1	0	0	0	0	15	1	0	0	3153
大石正己	1	1	3	266	37	14	869	763	550	65	4	0	0	11	0	2584
栗原亮一	1	0	0	0	0	9	883	318	452	451	322	0	0	3	0	2439
平田力之助	325	327	1528	99	82	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	2366
八尾信夫	0	0	1	19	0	17	85	1	0	45	0	2037	70	0	0	2275
尾崎行雄	2	0	1	4	48	2	119	107	48	1177	354	2	0	96	214	2174
海野謙次郎	0	0	0	139	195	1480	217	13	10	0	0	0	0	45	0	2099
深山一	0	0	0	1	8	55	26	0	0	6	0	270	1656	0	0	2022
濱田國松	1	0	0	0	14	48	289	475	335	604	126	0	1	35	39	1967
森茂生	451	383	384	224	171	53	73	111	9	5	1	0	0	0	0	1864
鈴木充美	5	0	165	690	889	2	13	37	10	2	10	1	0	0	0	1824
森川六右衛門	1	0	31	6	2	0	6	1	0	0	0	727	388	0	0	1162
竹原挨一	0	0	0	0	62	63	50	49	94	152	33	0	0	54	579	1136
矢土勝之	0	0	0	4	0	28	109	228	290	89	0	0	1	3	0	752

表２　第８回総選挙三重県郡部・郡別得票数一覧

（『伊勢新聞』明治36年３月５日朝刊１面）

氏名／郡名	桑名郡	員弁郡	三重郡	鈴鹿郡	河芸郡	安濃郡	一志郡	飯南郡	多気郡	度会郡	志摩郡	阿山郡	名賀郡	北牟婁郡	南牟婁郡	合計
尾崎行雄	37	11	57	38	520	7	537	406	444	1277	14	268	133	54	448	4377
森茂雄	715	753	565	435	399	42	16	56	26	2	0	0	375	0	0	3384
栗原亮一	3	0	53	416	21	5	1000	520	477	477	314	1	72	0	18	3377
速水熊太郎	0	0	31	168	417	10	60	310	389	373	7	196	270	181	203	2835
海野謙次郎	0	0	1	207	291	1575	317	132	11	0	0	17	0	1	5	2557
平田力之助	390	441	1536	73	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2466
森本確也	0	0	0	23	54	14	2	90	140	16	321	627	1038	0	27	2332
八尾信夫	0	0	17	31	31	10	24	0	0	0	0	1678	186	0	0	1977
中村太郎左衛門	41	351	704	194	466	2	85	43	0	0	0	5	3	0	0	1894
濱田國松	18	5	10	48	90	17	247	332	240	271	23	110	2	5	20	1438
松本恒之助	12	1	41	65	25	29	538	199	28	25	26	19	39	12	0	1059

表３　第９回総選挙三重県郡部・郡別得票数一覧

（『伊勢新聞』明治37年３月４日朝刊２面）　●は欠落箇所

氏名／郡名	桑名郡	員弁郡	三重郡	鈴鹿郡	河芸郡	安濃郡	一志郡	飯南郡	多気郡	度会郡	志摩郡	阿山郡	名賀郡	北牟婁郡	南牟婁郡	合計
尾崎行雄	124	80	99	29	310	16	648	414	1?2	722	10?	1?6	6	25	314	3347
大井卜新	8	5	2	128	2	0	1	0	0	●	0	2219	38	0	65	2976
速水熊太郎	126	145	182	46	502	0	122	261	370	2●6	4	0	598	120	87	2862
森茂生	593	842	631	5	29	2	35	0	0	0	0	29	0	0	0	2719
辻寛	0	23	107	459	43	194	221	53	65	3	1	8	66	3	0	2603
栗原亮一	4	49	338	335	5	1	643	351	399	209	229	0	2	0	●	2590
濱田國松	0	0	77	189	112	48	290	495	400	702	16●	41	16?	5	9	2494
海野謙次郎	0	0	27	88	208	1081	295	144	11	0	0	0	0	0	0	1846

表４　第10回総選挙郡別得票数一覧

（『伊勢新聞』明治41年５月18日朝刊２面）

人名／地名	桑名郡	員弁郡	三重郡	鈴鹿郡	河芸郡	安濃郡	一志郡	飯南郡	多気郡	度会郡	志摩郡	阿山郡	名賀郡	北牟婁郡	南牟婁郡	宇治山田市	合計
栗原亮一	690	203	391	945	64	671	902	488	844	343	764	0	0	36	56	201	6598
片岡直温	164	974	203	387	419	973	610	598	409	296	76	436	16	2	0	37	5600
尾崎行雄	24	19	114	49	531	81	900	558	326	1292	383	36	5	186	406	205	4116
濱田國松	2	0	103	66	157	124	613	751	322	1011	221	23	4	165	246	394	4402
大井卜新	0	0	0	116	76	1	94	2	0	1	0	2686	834	0	466	0	4276
中村豊次郎	440	431	389	66	116	0	41	0	3	0	0	845	1852	0	0	15	4198
森茂生	837	631	902	401	259	4	24	0	1	5	0	0	0	8	2	0	3074
川村曄	0	0	379	159	949	313	250	268	86	6	39	0	200	1	5	0	2655
辻寛	4	19	1511	433	591	47	0	0	5	0	0	0	0	1	0	0	2611

表５　第11回総選挙郡別得票数一覧

（『伊勢新聞』明治45年５月19日朝刊１面）

氏名／郡名	桑名郡	員弁郡	三重郡	鈴鹿郡	河芸郡	安濃郡	一志郡	飯南郡	多気郡	度会郡	志摩郡	阿山郡	名賀郡	北牟婁郡	南牟婁郡	宇治山田市	合計
濱田國松	1	271	33	152	6	209	469	845	522	1288	675	156	2	242	389	622	5882
梅原亀七	4	5	38	449	8	6	33	58	142	366	342	2322	1762	0	1	19	5555
尾崎行雄	16	9	25	125	323	210	850	709	529	1182	139	352	116	111	323	272	5291
岡八	165	103	192	63	862	1414	1036	919	337	55	34	0	30	8	0	7	5225
辻寛	139	49	1336	755	642	65	146	25	14	9	0	0	1	8	0	0	3189
森茂生	883	1131	603	277	11	0	24	37	16	21	0	0	0	8	0	1	3012
川村曄	1	21	1026	71	551	41	274	234	282	46	235	0	4	1	28	3	2818
加賀卯之助	662	506	545	443	352	2	0	3	2	1	0	0	0	0	0	5	2521
松本宗吾	3	0	0	95	455	148	728	81	315	22	9	95	3	1	1	5	1961
永濱出	0	6	0	70	0	1	6	1	10	4	0	900	816	1	1	2	1818

表６　第12回総選挙三重県郡部・郡別得票数一覧

（『伊勢新聞』大正４年３月27日朝刊２面）

人名／地名	宇治山田市	桑名郡	員弁郡	三重郡	鈴鹿郡	河芸郡	安濃郡	一志郡	飯南郡	多気郡	度会郡	志摩郡	阿山郡	名賀郡	北牟婁郡	南牟婁郡	合計
尾崎行雄	471	52	127	150	286	610	265	380	1033	689	2368	589	18	15	305	1094	8432
小林嘉平治	5	85	27	43	199	546	1228	2701	1291	540	61	104	11	4	0	1	6846
重盛信近	18	597	834	1785	567	625	28	1	85	125	23	65	33	0	27	1	4813
濱田國松	441	41	146	4	131	11	87	167	557	727	883	463	26	12	173	273	4142
川崎克	5	121	1	29	131	29	9	267	1	2	1	0	1853	681	0	2	3130
加賀卯之吉	4	795	698	200	449	371	70	24	152	2	1	10	12	23	29	0	2840
辻寛	2	59	25	1024	610	662	168	65	33	27	66	1	0	2	8	0	2752
川村曄	26	134	180	817	44	103	186	131	166	198	47	212	1	13	19	65	2342
横山正四郎	0	5	14	38	26	19	2	17	9	1	0	0	80	1709	4	7	1931
仁保亀松	0	0	0	0	6	0	1	1	0	0	1	2	1486	198	0	0	1695
野村甲子郎	3	15	82	25	92	166	31	30	11	6	2	17	251	78	0	1	810

1）『実業の日本』1935年38巻２号、36頁。
2） 同上。
3） 同上、37頁。
4） 同上。
5） 明治26年から大正11年まで行われていた試験であり、明治25年までは「代言人試験」として行われていた（潮木守一『京都帝国大学の挑戦』〈名古屋大学出版会、1984年〉、163頁）。
6） 前掲・潮木著、163頁。
7） 前掲・『実業の日本』、37頁。
8） 田中麻愛、渡辺穣「研究ノート　明治期における尾崎行雄の選挙―第７回総選挙の諸相―」『法政史学』69・70号（法政大学史学会、2008）。
9）『伊勢市史　第四巻近代編』（伊勢市、2013）。
10） 第７回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである（当選者／落選者、以下同じ）。木村誓太郎（憲政本党）3153票、大石正己（憲政本党）2585票、栗原亮一（政友会）2439票、平田力之助（政友会）2366票、八尾信夫（無所属）2275票、尾崎行雄（政友会）2174票、海野謙次郎（政友会）2099票／深山一（無所属）2022票／濱田國松（無所属）1967票、森茂雄（無所属）1865票、鈴木充美（政友会）1824票、森川六右衛門（無所属）1163票、竹原挨一（政友会）1136票、矢戸勝之（政友会）751票。
11）『伊勢新聞』明治35年７月25日朝刊２面「雑報」。
12）『伊勢新聞』明治35年８月13日朝刊１面「度会郡の投票状況」。
13） 度会郡や宇治山田を中心とした政友会系組織（前掲・田中麻愛、渡辺穣「研究ノート」）。
14） 神宮皇学館２年中退。宇治山田にて旅館を経営。県会議員に４度当選し、大正12年には県会議長を務めた。初代宇治山田市商工会議所会頭、庶民金庫組合会長等を歴任。（『三重県議会史第三巻』〈三重県議会、昭和45年〉）。
15）『伊勢新聞』明治35年８月16日朝刊１面。
16） 度会郡や宇治山田を中心とした政友会系組織。
17）『伊勢新聞』明治35年８月16日朝刊１面。
18）『伊勢新聞』明治35年８月16日朝刊１面。
19）『伊勢新聞』明治35年７月２日朝刊２面。
20） 前掲・田中麻愛、渡辺穣「研究ノート」。
21） 同上。
22） 前掲・『実業の日本』、38頁。
23）『伊勢新聞』明治36年２月17日朝刊２面。
24） 第８回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである。尾崎行雄（無所属）4377票、森茂生（中正会）3384票、栗原亮一（政友会）3377票、速水熊太郎（無所属）2835票、海野謙次郎（政友会）2557票、平田力之助（政友会）2466票、森本確也（無所属）2352票／八尾信夫（無所属）1977票、中村太郎左衛門（憲政本

党）1897票、濱田國松（無所属）1438票、松本恒之助（無所属）1059票。

25）　1904年３月17日から1905年12月23日まで存在した。政友会の幹部専制などに不満を持ち脱党したベテラン議員と政界再編成を目論む中立議員と西日本出身の代議士歴の短い実業家議員が中心となって組織した（前山良吉「甲辰倶楽部と日露戦時議会」〈『立教法学』立教大学、1991年〉121頁）。

26）　第９回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである。尾崎行雄（無名）3347票、大井卜新（甲辰倶楽部）2976票、速水熊太郎（無所属）2862票、森茂生（甲辰倶楽部）2719票、辻寛（無所属）2603票、栗原亮一（立憲政友会）2590票、濱田國松（甲辰倶楽部）2494票／海野謙次郎（立憲政友会）1846票。

27）『伊勢新聞』明治37年３月６日朝刊２面「総選挙と政界の更新」。

28）　同上。

29）　明治時代末期の革新派政党。明治三十九年（一九〇六）十二月二十日に政交倶楽部を中心に河野広中・島田三郎・大竹貫一・小川平吉ら代議士三十六名を擁して結成された。幹事菊池武徳・山口熊野を選び、既成政党の腐敗を攻撃し政界の革新をめざした。第二十三議会では日露戦後経営の膨張予算案を批判し、議会後の四十年三月政界革新同志会を結集、同年の府県会議員選挙、翌四十一年の衆議院議員選挙をめざし全国的運動をおこした。第二十四議会では憲政本党・大同倶楽部とともに西園寺内閣に政府問責決議案を提出し、さらに予算案・増税案にきびしく反対した。対外問題では明治四十年のヘーグ密使事件では韓国統監伊藤博文や西園寺公望首相に強硬案を建議し、翌年の第二辰丸事件にも対清強硬政策を要求した。五月第十回総選挙では二十九名の当選にとどまり、六月以降革新派、無所属代議士などとの提携を深め、十二月二十一日、第二十五議会の開会を目前に又新会として再出発した。『国史大辞典』、JapanKnowledge、https://japanknowledge-com.kras1.lib.keio.ac.jp、（参照 2022-01-16）の猶興会の項目。

30）『伊勢新聞』明治41年２月７日朝刊２面「雑報　増税反對實業大會」。

31）　同上。

32）『伊勢新聞』明治41年４月26日朝刊２面「雑報　縣下逐鹿况（四）」。

33）『伊勢新聞』明治41年５月11日朝刊２面「雑報　逐鹿彙聞」。

34）　同上。

35）『伊勢新聞』明治41年４月26日朝刊２面「雑報　縣下逐鹿况（四）」。

36）　第10回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである。栗原亮一（政友会）6598票、片岡直温（無所属）5600票、尾崎行雄（猶興会）5116票、濱田國松（猶興会）4424票、大井卜新（政友会）4275票、中村豊次郎（無所属）4188票、森茂生（政友会）3075票／川村曄（政友会）2664票、辻寛（政友会）2617票。

37）『伊勢新聞』同年５月17日朝刊２面「雑報」。

38）「伊山」に関する文献がほとんど存在しておらず詳細は不明であるが、紙面の記述から阿山・名賀（現：伊賀市周辺）の総称であったと考えられる。事実、前回伊山方面での活躍が報じられた大井卜新は、阿山・名賀での得票が多かった。

39）　紀伊国牟婁郡（現：三重県熊野市）出身の医師・実業家。蘭学と医学を学び大

阪に医院を開いた。また、大阪電灯などの重役を務めた。

40）『伊勢新聞』明治45年４月25日朝刊２面「縣下選挙界」。

41）摂津国出身の実業家。伊勢電気鉄道取締役、浪速火災保険取締役、台北製糖取締役、京成電気軌道取締役などを歴任した。

42）同上。

43）『伊勢新聞』同年５月６日朝刊１面「選挙形勢」。

44）第11回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである。濱田國松国民党）5874票、梅原亀七（無所属）5551票、尾崎行雄（政友会）5291票、岡八（無所属）5243票、辻寛（政友会）3187票、森茂生（政友会）3072票、川村曄（政友会）2716票／加賀卯之吉（国民党）2537票、松本宗吾（国民党）1937票、永濱出（無所属）1878票。

45）『伊勢新聞』明治45年５月９日朝刊１面「逐鹿界」。

46）成田正美『明治後期における地方名望家の大山林経営』（筑波大学、2010年）33頁。

47）『伊勢新聞』同年５月11日朝刊１面「選挙予想」。

48）同上。

49）同上。

50）『伊勢新聞』大正４年３月26日朝刊２面「雑報　決戦期至る」。

51）第12回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである。尾崎行雄（中正会）8432票、小林嘉平治（無所属）6846票、重盛信近（無所属）4813票、濱田國松（国民党）4142票、川崎克（中正会）3130票、加賀卯之吉（同志会）2840票、辻寛（同志会）2752票／川村曄（政友会）2342票、横山正四郎（無所属）1931票、仁保亀松（無所属）1698票、野村甲子郎（同志会）。

52）同上。

53）第13回総選挙三重県郡部の選挙結果は次の通りである。天春文衛（立憲政友会）5810票、尾崎行雄（憲政会）5252票、濱田國松（国民党）4468票、小林嘉平治（憲政会）4429票、佃安之丞（無所属）4050票、堀川美哉（国民党）3677票、川崎克（憲政会）3630票／加賀卯之吉（憲政会）2951票、辻寛（憲政会）2721票。

54）『伊勢新聞』大正９年３月30日朝刊１面「本縣の總選挙氣分（中）」。

55）『伊勢新聞』大正９年４月28日付夕刊１面「本縣逐鹿界（一）」。

56）『伊勢新聞』大正９年３月28日夕刊１面「本縣逐鹿形勢」。

57）早稲田大学政治学科退学。大正２年に伊勢新聞社宇治山田支局長、宇治山田市議会議員当選。県議会議員を２回務めた。（『三重県議会史第三巻』〈三重県議会、昭和45年〉）。

58）『伊勢新聞』大正９年５月２日朝刊２面「山田氏と新候補者」。

59）『伊勢新聞』同年５月10日朝刊２面「本縣選挙界」。

60）『伊勢新聞』同年５月３日朝刊２面「本縣選挙界」。

61）『伊勢新聞』同年５月３日朝刊２面「第三區の掉尾戦」。

62）三重県伊勢市の町名。

63）　同上。

64）　文献が存在せず、同紙の会派系統は不明であるが、既述の報道内容から濱田、国民党に系の新聞であったと推断できる。

65）　前掲・『伊勢新聞』大正９年５月３日朝刊２面「第三區の掉尾戦」。

66）　第14回総選挙三重県第３区の選挙結果は次の通りである。濱田國松（国民党）1092票／国府重周（無所属）340票。

67）『伊勢新聞』大正13年５月12日朝刊２面「全國の興味を唆つた神都政戦の跡」。

68）『伊勢新聞』大正13年３月24日２面「濱田對西田の調停ダメ」。

69）『伊勢新聞』大正13年４月20日朝刊２面「興味横溢の第三區對抗戦」。

70）　同上。

71）　同上。

72）『伊勢新聞』大正13年４月30日朝刊２面「候補地拡張申請」。

73）　同上。

74）『伊勢新聞』大正13年５月７日朝刊２面「第３区は大激戦」。

75）『伊勢新聞』大正13年５月11日付夕刊「第３区の大接戦」。

76）　第15回総選挙三重県第３区の選挙結果は次の通りである。濱田國松（革新倶楽部）1249票／西田周吉（政友本党）592票。

77）『伊勢新聞』大正13年５月12日朝刊２面「新都政戦の跡」。

78）『衆議院議員総選挙一覧第７至13、14、15回』（衆議院事務局、大正７年）127-128頁。

79）『衆議院議員総選挙一覧第16回』（衆議院事務局、昭和３年）171頁。

80）『衆議院議員総選挙一覧第７至13、14、15回』（衆議院事務局、大正７年）127-128頁。『衆議院議員総選挙一覧第16回』（衆議院事務局、昭和３年）171頁。

81）　玉井清「第16回総選挙における政党合同の影響について　革新倶楽部系候補者の動向を中心に」（『法学研究』慶應義塾大学法学研究会、2012年）３頁。

82）　同上、４頁。

83）　三重県飯南郡松阪町出身の実業家・政治家。松阪鉄道社長、南勢新聞社長などを歴任した。出典：広新二『日本政治史に残る三重県選出国会議員』（扶桑社、1985年）113頁。

84）『伊勢新聞』昭和３年２月13日朝刊２面「本縣逐鹿界」。

85）　松坂町（現：松阪市）は当時飯南郡の一部であった。

86）『第16回衆議院議員選挙一覧』（衆議院事務局、1928年）180-186頁。

87）『伊勢新聞』昭和３年２月５日朝刊２面「本縣逐鹿界」。

88）『伊勢新聞』昭和３年２月８日付夕刊１面「本縣逐鹿界」。

89）　前掲・『第16回衆議院議員選挙一覧』（衆議院事務局）。

90）　第16回総選挙三重県２区の選挙結果は次の通りである。池田敬八（民政党）２万959票、尾崎行雄（無所属）１万9070票、濱田國松（政友会）１万2259票、岸本康通（明政会）１万718票／安保庸三（政友会）１万86票、河谷秀夫（労働農民党）3089票。

91）『伊勢新聞』昭和５年２月12日朝刊１面「神都を中心に血みどろ戦」。
92）『伊勢新聞』昭和５年２月１日朝刊１面「疾風迅雷的に堂々敵を撃破」。
93）『伊勢新聞』昭和５年１月27日朝刊２面「候補者蔟出し第２區激戦地化す」。
94）『第17回衆議院議員総選挙一覧』（衆議院事務局、1930年）192-199頁。
95）同上。
96）第17回総選挙三重県２区の選挙結果は次の通りである。尾崎行雄（中立）１万8414票、濱田國松（立憲政友会）１万2919票、牛場清次郎（立憲民政党）１万2826票、池田敬八（立憲民政党）１万2515票／角源泉（立憲民政党）１万1131票、岸本康通（立憲政友会）9013票。
97）『伊勢新聞』昭和７年２月15日付夕刊１面「果然激戦の第二區に潜行的奇戦開始さる」。
98）度会郡出身。県会議員を４度務めた。昭和21年公職追放。衆議院議員総選挙６回当選。自民党三重県支部連合会長、自由民主党総務、運輸政務次官、地方行政委員長等を歴任。
99）三重県会議員を４度務めた。大正２年県会副議長、大正10年県会議長。昭和21年衆院選当選。三重県幼魚水産顧問や三重県漁港協会長、三重県真珠養殖事業審議会委員などを歴任した。
100）北牟婁郡尾鷲町出身。中央新聞政治部長を務めた。
101）『伊勢新聞』昭和７年２月５日付夕刊１面「第２区の政友派危機以前として去らず」。
102）同上。
103）『第18回衆議院議員総選挙一覧』（衆議院事務局、1932年）190-197頁。
104）『伊勢新聞』昭和７年２月５日付夕刊１面「第２区の政友派危機以前として去らず」。
105）同上。
106）前掲・『第18回衆議院総選挙一覧』。
107）前掲・『第18回衆議院総選挙一覧』。
108）第18回総選挙の三重県２区の選挙結果は次の通りである。濱田國松（立憲政友会）１万9960票、尾崎行雄（中立）１万5324票、後藤脩（立憲政友会）１万5093票、池田敬八（立憲民政党）１万1012票／牛場清次郎（立憲民政党）9794票、長井源（立憲民政党）8921票。
109）『伊勢新聞』昭和11年１月１日朝刊１面「總選挙を目指して縣下政界色めく」。
110）『伊勢新聞』昭和11年１月30日朝刊１面「“勝たねばならぬ”もがく政友巨頭連」。
111）三重県飯南郡出身。三重師範学校を卒業し、三重県内の尋常小学校の教員を経て、大正12年明治大学法律学科を卒業した。戦前の総選挙では３回当選し、民政党の筆頭総務を務めた。戦後初の昭和21年総選挙では通算４回目の当選を果たし、第一次吉田内閣の組閣にて文部大臣として入閣するところ、GHQ の資格審査に引っ掛かり、公職追放となった。通算当選６回（『日本政治に残る三重県選出国会議員』〈扶桑社、1985年〉169頁）。

112）『議会制度制度百年史　衆議院議員名鑑』466-477頁。

113）第19回総選挙における三重県２区の選挙結果は次の通りである。尾崎行雄（中立）２万2598票、長井源（立憲民政党）１万7847票、濱田國松（立憲政友会）１万2804票、角源泉（立憲民政党）１万2242票／濱地文平（立憲政友会）１万392票、石原圓吉（立憲政友会）7222票、別當好平（立憲政友会）3097票。

114）『第19回衆議院議員総選挙一覧』（衆議院事務局、1936年）197-203頁。

115）同上。

116）同上。

117）『伊勢新聞』昭和11年２月20日朝刊１面「すでに決した縣下の当選民政四名政友二名中立一名」。

118）『伊勢新聞』昭和12年１月22日付号外「政府・政黨の對立先鋭化　議會遂ひに二日間停會　政局いよ〳〵暗礁へ」。

119）第20回総選挙三重県２区の選挙結果は次の通りである。尾崎行雄（中立）１万9971票、濱地文平（政友会）１万5658票、長井源（民政党）１万3370票、濱田國松（政友会）１万3012票／角源泉（立憲民政党）１万56票、田村稔（政友会）7968票、別當好平（政友会）1585票。

120）『伊勢新聞』昭和12年４月19日朝刊１面。

121）『伊勢新聞』昭和12年４月19日朝刊１面。

122）『伊勢新聞』昭和12年４月29日朝刊２面。

123）『第20回衆議院議員総選挙一覧』（衆議院事務局、1937年）188-195頁。

124）同上。

125）同上。

126）同上。

127）『伊勢新聞』昭和12年１月22日付号外「濱田氏の巨弾で大波瀾」。

128）『伊勢新聞』昭和12年１月22日朝刊２面「地元選良らはかく語る」。